

津軽平野の地形について (特に弘前盆地の洪積台地を中心にして)

小野寺 光 彦

<Ⅰ>はじめに

津軽平野南部の弘前盆地には、岩木川を中心にした沖積地と山地との間に洪積台地が広くみられるほか、扇状地や河岸段丘さらに、各河川に沿って自然堤防が数多くみられる。

筆者は、この津軽平野南部の弘前盆地の地形のうち主に台地について調査し、これを分類してみた。調査方法は現地調査を主にして合わせて空中写真を利用した。

<Ⅱ>台地地形

弘前盆地西部の岩木山麓には、標高17m～60mの洪積台地と思われる起伏に富んだ丘陵が分布し、同様の地形は盆地南部にもみられる。また盆地東部の浪岡・黒石・尾崎の各地区にも同様洪積台地がみられる。

このように弘前盆地においては台地は、全般的に見られるので西部・南部・東部・北東部・南東部の五地域に分けて考察してみた。本来ならば、面の高度・面の傾斜・起伏・平坦度・開析度・上下面の入り組み等を検討すべきであるがここでは面の高度・堆積物の粒度・色・厚さ・混合比・空中写真による判読結果を利用した。

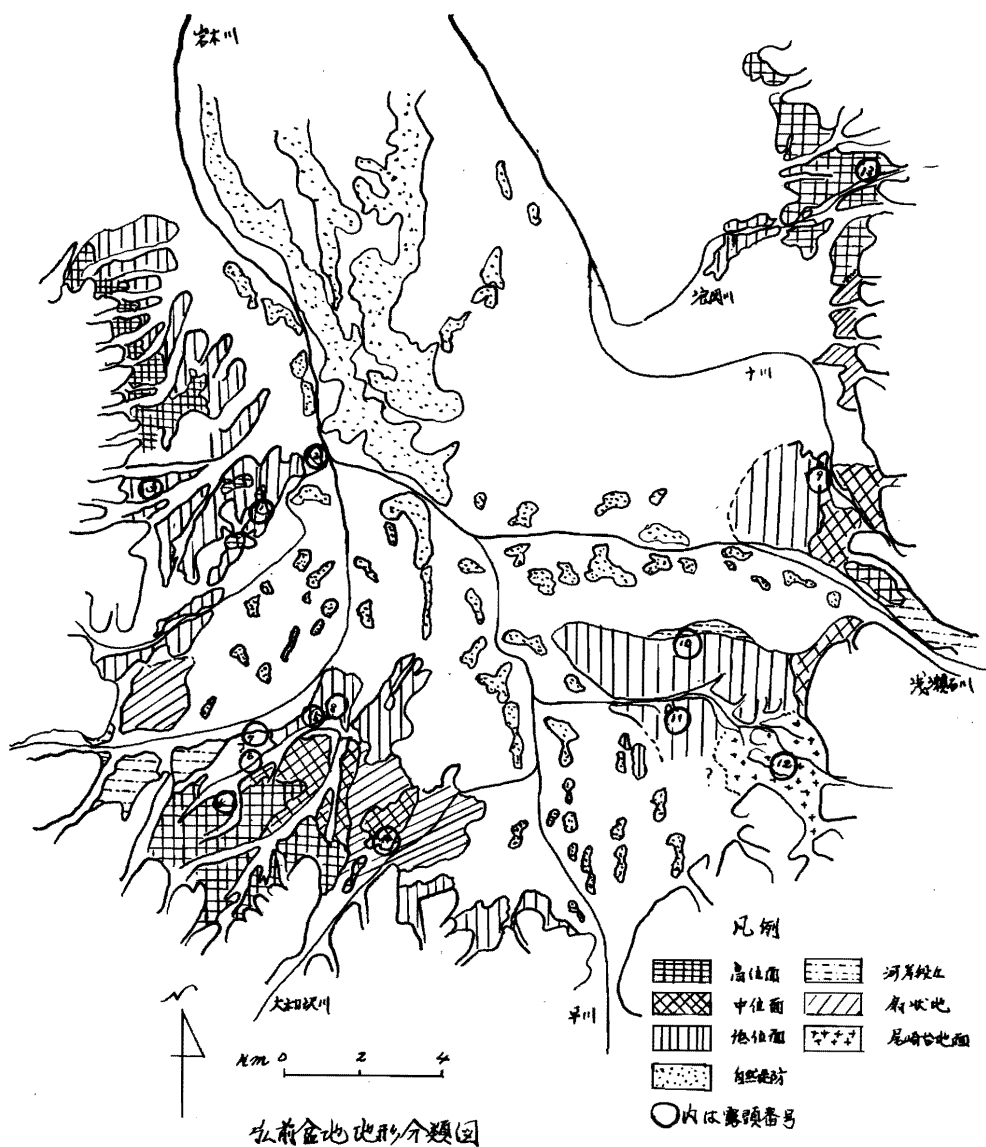
(1) 弘前盆地西部地域

この地域は大石川と岩木川にかこまれた地域で台地面は大きく2つに区分される。すなわち高位台地面と低位台地面である。

高位台地面は標高40m～60mで開析が激しく、独孤部落や住吉部落付近では島状に残っているにすぎない。露頭断面は上部から赤褐色ローム・赤褐色風化礫・黄褐色硬質砂層・白色シルト・浮石・粘土・青灰色硬砂・粘土・シルトとなっている。高位面は酒井軍次郎氏(1960)のいう黄金山層と接していて、その区分は明確ではないが傾斜変換点及び空中写真で判読した。

低位台地面は標高20m～38mである。高位面同様開析が激しく、沖積地に向かい緩傾斜を示し、標高30m前後の面と、20m前後の面がみられる。沖積地との比高は北部では少なく土地利用によってわかる程度であるが南部では、1m～2mぐらいである。露頭断面は茶褐色ローム・茶褐色風化礫・黄褐色シルト質砂層となっている。

低位面の問題点に船沢地区がある。岩井武彦氏(1965)によると扇状地となっているが



筆者はむしろ、低位台地面と判断した。折笠部落の露頭断面では、茶褐色ローム層・風化した細礫および中礫が含まれた層・黄褐色粘土となっている。

(b) 弘前盆地内部地域

弘前市南部の台地は、西は棚内川以東、南は清水村梨ノ木付近までで、最大標高110 m～120 mに及んでいる。これらの面は土淵川及び旧立淵川により開析が進んでいるが筆者は、

この地域を3つに区分した。すなわち、
高位台地面・中位台地面・低位台地面である。

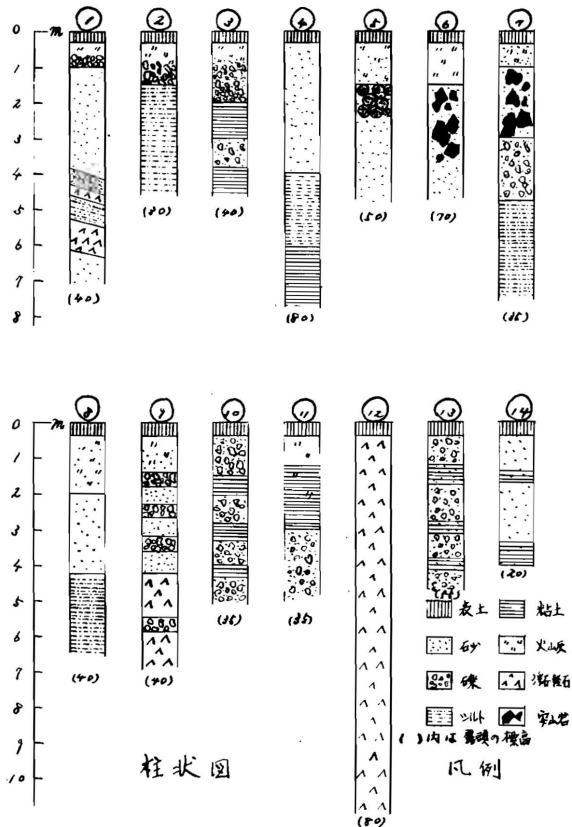
高位台地面は標高80m～120m程度で、西部は平坦で緩傾斜をしている。東部には笹森山・一本松高地など起伏に富んだ小丘陵がある。土淵川・旧土淵川は、標高150m付近まで開析谷をつくっておりかなりの侵蝕が進んでいる。露頭は比較的少ないが、表土・浮石質砂層・黄白色粘土質砂・灰色シルト・暗灰色粘土の順序になっている。

中位台地面は標高60m付近から80m付近まで分布している。緩傾斜であり、傾斜変換点は樹木町登口。才四中学校前・弘盛橋西方300mの地点等にみられる。長勝寺南方の山観音寺ののる面もこれである。露頭断面は、赤褐色ローム層・浮石質砂層（この中には風化した軽石が多数含まれる）黄褐色砂層となってくる。堀越村の奥野を南限とする島状の台地や、西弘前駅付近にも同様の露頭断面がみられる。

低位台地面は、標高40m～60mであり、弘前市街地をのせて最も広く分布しているものである。沖積地との境界は、長勝寺から、弘前公園・中央高校裏側と続く急崖で約3m～10mと東に向かい低下している。この急崖は笹森町東照宮を通り百石町西方、かくはデパートから大円寺付近へと続いている。

この南部地域に於る問題点は、常盤坂に交換点をもち、配水場。唐無坂南西地区に分布する小丘状の地形の存在である。リンゴ公園付近の露頭からはローム層の下に紫蘇輝石安山岩がでる。又配水場下の露頭でもローム層・角礫安山岩・その下に鳴沢層と思われる砂礫層・黄白色シルトがみられる。この地区をどう区分するかは今後の問題である。

<才2図>



(イ) 弘前盆地北東部地域

この北東部地域は浪岡付近を中心とする標高30 m～60 mに分布し、岩井武彦氏(1965)により扇状地と報告されていた。この台地は沖積地に向かい比較的緩傾斜である。露頭断面は上から、ローム層・砂と礫の互層、となり水平に堆積しており、むしろ扇状地よりも洪積台地と考えられる。現在の浪岡町は河岸段丘か台地の低位面と考えられるが低位台地面と考えても不思議ではない。

(ロ) 弘前盆地東部地域

黒石付近を中心とするこの地域は、標高35 m～110 mに分布し、浅瀬石川に開析された扇状地地形を示す。岩井武彦氏は開析扇状地と報告している(1965)。調査の結果筆者はこの地域を3つの地形面に分けた。すなわち高位面(標高80 m～90 m)、中位面(標高60 m～80 m)、低位面(標高30 m～60 m)である。

高位面は牡丹平に顕著にみられるもので小さな平坦面が残っているにすぎない。中位面は山地に面した所に分布し、リンゴ園に利用されている。ローム層の下は砂と礫の互層で高位面との比高は1 m～2 mである。

低位面は黒石台地では最も広く分布し、北部の黒石市をのせる標高36 m～55 mの面と、南部の尾上町をのせる標高30 m～70 mの面に2分される。浅瀬石川の侵蝕によって形成された東西に走る急崖が北部では4 m～10 m、南部では1 m～8 mの比高をもって存在する。露頭断面は黒石北方の十川付近で、ローム層・砂と礫の水平互層・礫層・浮石層となっている。

(ハ) 弘前盆地南東部地域

尾崎付近を中心とするこの南東部地域は標高50 m～100 mの地域に分布し、尾崎村を中心に川の水の侵蝕を強く受けた台地状の地形を示す。露頭断面ではローム層の下に3 m～15 mの厚さをもつ浮石層がみられる。これは十和田八甲田系のもので川によって運搬、再堆積されたものと考えられる。

<Ⅱ>低地地形

津軽平野は南北に細長くのび、その中を岩木川が北流しているが津軽平野南部では各河川の付近に各種の地形がみられる。

弘前盆地南部には大和沢川による扇状地があり、清水森・門外・大清水等に湧水帯があり、扇面はリンゴ園に利用されている。又、旧大和沢による扇状地が弘前市街地に発達していると思われるが調査不足のため確かめられなかった。盆地南西部の大清水部落付近には、旧岩木川

によると思われる扇状地がみられる。標高は40 m～50 mに及んでいて、大清水、派立の2つの部落中心の高まりの間に1 m弱の急崖をもち、全体として小丘陵状をなしている。一町田・二本松部落付近は湧水帯となり、露頭はないが水田中に多く分布する礫から推定して扇状地と考えられる。又盆地東部の黒石北方には、本郷・三島・上十川等の各部落をのせている小さな扇状地がみられる。

次に自然堤防であるが各河川付近の集落地区はリンゴ畑、蔬菜畑としてみられる。特に藤崎・板柳町周辺には数列にわたってみられる。

河岸段丘は岩木川沿岸の地形、紙漉沢・下五所・五所・下湯口・悪戸等にもみられるほか浅瀬石川沿岸にもみられる。

<Ⅷ>おわりに

津軽平野南部の弘前盆地における地形は、洪積台地を中心に扇状地・自然堤防・河岸段丘などがみられるが今回は台地面の区分だけに終わってしまった。その他の地形については今後の問題としたい、なお文中の露頭断面は柱状地(才2図)にまとめ番号を地形学図(才1図)の番号に一致させた。

参考文献

1. 酒井軍次郎(1960): 弘前市域の水文地質及び地下水に関する研究(弘前市役所)
2. 岩井 武彦(1965): 青森県津軽盆地周辺に発達する新生界の地質的並びに古生物学的研究(弘大研究紀要才14号)
3. 水野 裕(1967): 郷土を科学する2—地形—(陸奥新報社)
4. 梅津 昭雄(1967): 弘大地理—津軽平野北東部の段丘地形—(弘大地理3)